# Summer Conference '99

**- Activity Theory & EduTech -**

Engstrom,Y.（1999）Activity theory and individual and social transformation. Engstrom,Y.（ed）（1999）Perspectives on Activity Theory（Learning in Doing Social,Cognitive and Computational Perspectives）Cambridge University Press.

rep. SUZUKI, Mariko
Shiga University

## ■はじめに（Introduction）

1980 年代から 90 年代における活動理論の国際化は、世界規模での政治的・経済的システム大変革のまっただ中で起こった。このような時代的背景を受け、個人と社会構造を関係づけるアプローチが今まで以上に求められている。

## ■活動理論って、どんなもの？（Activity theory: What kind of theory?）

活動理論は三つの歴史的起源をもつ。カントやヘーゲルという古典的ドイツ哲学、マルクスやエンゲルスの著作、ヴィゴツキーやレオンチェフやルリアのソビエト連邦時代のロシア文化歴史心理学がそれである。今や活動理論は国際的、学際的なものになりつつある。

現在起こっている活動理論の拡張的な再構成は新しいタイプの理論へと向かうであろう。そのために必要なのは、（旧来の弁証法的哲学における）一元論を共存させうる（豊かで動的な人間活動を表せる）多声性である。

以下、六つのテーマそれぞれを対立する二つの立場から論じ、活動概念を考えていく。これらは、1988 年以降の出版物や電子的ディスカッションにもとづいている。

## ■二分法（Dichotomies）

### 1. 精神過程　対　対象に関連した活動
（Psychic process versus object-related activity）

Brushlinsky（1990）によれば、主体による対象に関連した活動は継続的なものではなく、精神過程は継続的なものとなる。つまり、対象に関連した行為や活動は継続的な精神過程の成果や結果として二次的に形づくられる。ここで問題となるのは、活動の源が

個人的で内的な精神源だけにされてしまい、活動が対象と関連していることを強調してきた活動の文化的・社会的特徴を排除してしまうことである。だが、人間活動における継続・非継続の問題は重要である。2. へ。

### 2. 目標を志向する活動　対　対象に関連した活動
（Goal-directed action versus object-related activity）

心理学、認知科学、社会学のほとんどの理論では、個々の活動は分析単位であり人間活動を理解する鍵とみなされる。活動における目標や計画の働き、順序だった構造、調節レベルには注意が払われてきたが、このような理論は、目的をもった人間の行動のアーティファクトによる媒介の側面や文化的側面と同じく、社会的に分散された面や集合的な面を説明できない。時間はバラバラに切られがちで、人間活動の継続的で自己再生的で組織的で長期的な面は、ほとんどの活動理論で抜け落ちている。

レオンチェフの有名な三つのレベルのスキーマー activity, action, operation（相当するのは、motive, goal, instrumental conditions）－は、分析の範囲を広げ、私たちの注意をレベル間で進行する転移へと向けさせる。だが現実には、具体的な分析はとても難しい。権威ある機関や人々は、彼等の活動や歴史を具体的に分析されるのをしばしば嫌うからである。

### 3. 道具を媒介する成果　対　記号を媒介するコミュニケーション
（Instrumental tool-mediated production versus expressive sign-mediated communication）

レオンチェフへの批判は二重の対立、１）記号による媒介と道具による媒介との対立、２）主体－主体間の関係と主体－対象間の関係との対立、で表される。三つ目の対立として、コミュニカティブ活動と道具的活動間の関係も示し得る。レオンチェフへの批判と同調という意見の相違は、彼や彼の仲間たちの分析やモデル化が不完全であるためであろう。彼らはヴィゴツキー（1978）の三角形モデルに回帰したが、それを発展し、拡張させ、集合的な活動システムの構造を描こうとはしなかった。

### 4. 相対主義　対　歴史性（Relativism versus historicity）

歴史性－調査下での活動の歴史的分析－は、活動理論にもとづく研究においてほとんど無視されている。明らかな原因として、マルクスーレーニンの歴史観があげられる。そのような考えは生活の社会文化的多様性を一次元的スケールに変えてしまう。だからといって相対主義にも問題がある。その考えも、すべての社会的実践で、判断や決定が日々行われているという現実を無視している。もう一つの原因は、活動システムの構造モデルの中にひそんでいる。歴史分析は、扱いやすいサイズである単位に焦点をあてる。個人を単位にするのでもなく、文化や社会を単位にするのでもなく、集合的な活動システムを単位とするとき、歴史は扱いやすいものとなり、個人的な伝記を超える。

5. 内化　対　創造と外化（Internalization versus creation and externalization）

内化の研究が支配的で、アーティファクトの創造、社会パターンの産出、活動の文脈で拡張する転移に関する研究はほとんどない。

6. 説明原理　対　研究の目的（Principle of explanation versus object of study）

1970 年代から、活動概念は説明原理か研究目的かーという議論がある。活動理論のコアとなる概念的仕事は具体的な歴史的材料やケースに基づいたものであり、実際のところ、概念システムが開放的で不完全であるため、定義された理論的枠組みをただ単に実践に適用しようとする研究者はじらされる。だが、活動の概念や構造を説明としてしか扱わないような研究からは、概念的あるいは方法論的基礎は吟味できない。

## ■鍵となる媒介（Mediation as a key）

以上は、三つの重大な質問に要約できる。

１）我々は活動理論の単位をどのように描けるだろうか？活動システムの構造や動的関係のモデル化の方法はどのようなものか？
２）我々は歴史性と発達の見解を活動理論的な分析にどのように結びつけていけるだろうか？
３）どのような方法論が活動理論研究にふさわしいのか？

活動概念を論じるとき、媒介（mediation）の考えについて余り注意が払われていない。道具や記号による媒介は、ヴィゴツキー、レオンチェフ、ルリヤ等に通じる概念で、単に心理学的な考えであるばかりでなく、個人の心を文化や社会から孤立させたデカルト哲学を打ち破るものである。

伝統的な社会科学と心理学は、人間は社会によって外からコントロールされるとする考えと人間自身によって内からコントロールされるという考えで対立していた。ヴィゴツキーは媒介という考えを創りだしたとき、コントロールについての革命的な意味に気づいていた。その考えとは、人間は、生物学的刺激にもとづく”内側から”ではなく、アーティファクトを使いそして創る”外側から”、自分自身の行動をコントロールできるというものである。このような見解は、人間の活動と分けることのできない構成要素としての媒介に関する研究を誘う。

## ■活動システムのモデル化（Modeling the activity system）

例として、筆者のスピーチの準備やスピーチする活動を、古典的三角形で説明する（図１.１）。この表記の問題点は、著者の活動の社会的・共同的側面が説明できないことに

ある。そこで、モデルを図１.2 のように拡張してみる。これにより、object は変わらないが、subject、mediating artifact、outcome が変わってくる。
活動の社会的基礎として、rules、community、division of labor が加わる。さらに、二種類の contradictions が mediating artifact と object、object と division of labor の間にあると分析できる。このモデルは反論や批判、推敲や代替案を引き起こすであろう。それがモデル化の目的でもある。

個人的活動の分析からより広い活動の文脈や背景の分析へ移行することは有益なことである。活動は予測可能なものでもなく、合理的なものでもなく、機械的でもない。非常によく練り上げられ、能率的にみえる活動であっても、失敗や分裂、予期せぬ革新に巻き込まれるものである。特定の活動レベルにとどまっていては、このようなことは説明できない。活動システムの分析は、自覚的な活動主体の”背後に隠れ”、失敗や革新をもたらす矛盾を照らし出す。示したモデルはまた、活動システムの構成要素としての、主体－共同体関係－コミュニカティブ関係をきわだたせる。活動とコミュニケーションの対立を克服するような、新しいモデル、統合モデルが開発されることを信じている。

## ■歴史性と多様性（Historicity and diversity）

活動システムは拡張するサイクルであるととらえられてきた。

図１.３のように、活動システムの拡張するサイクルは、内化から始まる。そこではノビスが社会化され、訓練を受け、有能なメンバーとなっていく。創造的な外化は個々の革新として表れる。活動において分裂や矛盾が生じることにより、内化は徐々に批判的自己省察の形を取るようになり、解決策を探す外化が増す。新しい活動モデルがデザインされると、外化はピークに達し、新しいモデルが安定化すると、学習や発達において再び内化が支配的となる。

拡張するサイクルは、個人の学習レベルでヴィゴツキー（1978）が論じた発達の最近接領域にも似ている。歴史性という視点で眺めると、拡張するサイクルの特徴は、前もって決められる一次元的な発達ではないことである。”どのように発達するか”は、拡張するサイクルの中で、不確実に集中的な探索により、ローカルに決まっていく。

活動システムは多声性とも言える。拡張するサイクルは様々な参加者の多くの声、異なる視点やアプローチの再交響化である。このとき歴史性は、活動システムの過去のサイクルの検証を意味する。多様な声の再交響化がドラマチックに進むのは、異なる声が、活動システムにおける歴史的背景に対立するようなときである。

## ■転移への回帰：発達の方法
## （Back to transformation: The developmental method）

形成的・発達的実験は活動理論に最も適する研究方法であり、特徴でもあると言われてきた。Scribner（1985）は、適切な方法である Vygotsky の考えは単純なテクニックに

矮小化できないとした。彼女は Vygotsky が描いた方法論を四段階でたどっていく。：１）一時的な日常行動、あるいは基本的行動の観察、２）調査下における行動の文化的発達の歴史的段階の再構成、３）基本的行動から高次の行動への変化の実験的成果、４）自然に生起する行動における実際の発達の観察。

これは実際のところ、高次精神機能となる文化的内化を強調する、個人レベルの転移を理解するための、循環的な方法論である。今日明らかになってきたのは、理解され、マスターされるべき種類の転移にとどまらないということである。人類は、確立された文化獲得への挑戦だけでなく、望ましい文化を形成すべき状況にも直面している。人間の活動システムにおいて進行しているそのような転移を理解するために、われわれは拡張的な周期を研究する方法論を必要とする。そのような方法論は、心理学や社会学や他のいかなる学問の境界領域にも、なかなか合うものではない。

このような方法論が開発されるのは、そのような転移が進行している実際の活動システムに研究者が入り込んだときと指摘したい。実践者から出てきたいわゆる自発的な考えや努力を理想化するような、素朴なアクション・リサーチに戻りなさいと言っているのではない。そうではなく、私が心するタイプの方法論が必要としているのは、ローカルな参加者とともに新しい活動モデルを築く目的で、活動理論の一般的な考えを実践的妥当性と適性を厳密に吟味することである。そのようなことは、注意深い歴史的・経験的な活動分析にもとづくとき可能となる。

このアプローチは形成的実験に新しさをもたらす。生徒のスキルや心理機能を実験的に形成するだけでなく、研究者が被験者と一緒に新しいアーティファクトや実践の形式を社会的に形づくることに従事するようになる。結果の妥当性と一般性は類似する活動システムでの新しいモデルの発展性、拡散性、多様性、増殖性によって決定される。

中間的な理論的概念は、一般理論と特定の実践の間に双方向の橋をかける。具体的な活動を研究の対象とすることによって、説明原理としての活動概念は継続して、再試され、再構成される。

このようなアプローチは急進的な地方第一主義を暗示する。社会経済的形式の基本的な社会的関係と矛盾－そして、質的変容の可能性－がその社会のローカルな活動個々に表れている。逆に言えば、最も力強く最も個人的でない社会的構造は、媒介的アーティファクトに助けられた具体的な人間によって成されるローカルな活動から成っていると見ることができる。工場のフロアーや街角ではなく、高官のオフィスや重役用会議室であっても。このような意味で、中心的な権力に依存する固定的構造としてのピラミッドとしてではなく、内的に関連した活動システムの多層的ネットワークとして、社会を見るよう心掛けることが有益である。